

連載エッセイ
essay

第15回

STC に入職して



わ さ は ら ま い こ
和佐原 舞子

(一財)
砂防・地すべり技術センター
企画部 企画広報課 主事

砂防・地すべり技術センター（以下「STC」）に入職して早くも1年と半年が経過した。この期間、様々な業務を通じて多くの学びを得ることができた。今回はこれまでの経験を振り返り、思いを記してみたいと思う。

恥ずかしながら私は、「砂防」という言葉をSTCに入職するまでほとんど聞いたことがなかった。学生時代は農学や工学とは異なる学問を専攻しており、砂防に関する知識は全く持っていなかった。入職後1ヶ月も経たないうちに行われた人材育成プログラムの講義で初めて砂防について学び、講義の受講からしばらく経った日に訪れた砂防図書館で、壁一面に飾られたSABO（砂防）カードを目にして、全国にこれほど多くの砂防施設が存在していることに驚かされた。講義や砂防図書館で触れた砂防の話題は、STCが取り組む事業内容の一端に触れるきっかけとなった一方で、自身の最初のSTCでの業務は、総務部での仕事に取り組むことだった。

入職1年目に配属された総務部では、まず全職員の名前を覚えることから開始した。入職当初は、職員の名前はもちろんのこと、座席の配置や備品の場所さえも分からず、尋ねられたことにうまく答えられないどころか、反対に質問をしてしまい、職員の方々をかえって困惑させてしまうことも多々あった。それでも少しずつ総務部での仕事に慣れ、日々先輩職員や上司の方々に支えていただきながら、何とか1年目を乗り越えることができた。

そして2年目に企画部へ異動となり、そこでの業務は総務部での仕事とは大きく異なっていた。現在は、ホームページの編集や機関誌saboの作成業務を担当している。ホームページは昨年の6月にリニュー

アルされ、以前と比べ見やすさ、そして分かりやすさが向上した。文字や画像の配置によって記事の読みやすさが左右される点は、機関誌の作成においても通ずるものがあると常々感じている。

機関誌では、執筆依頼をはじめ、原稿の確認など、作成プロセス全般に携わっている。STCに入職して初めて機関誌 sabo を読んだ際、とても読みやすい機関誌であるという印象を抱いたが、実際作成に携わる立場になった今、その読みやすさは細部まで工夫やこだわりが込められた結果だということに気づかされた。

機関誌 sabo は例年 8 月と 2 月の年 2 回発行されているが、配属前は比較的ゆとりのあるスケジュールで機関誌作成が進んでいるものと思っていた。しかし実際には 8 月発行の夏号と 2 月発行の冬号の間の約半年間で発行日を基点にし、逆算してスケジュールを組み立てることから始まり、掲載内容および執筆者の選定、記事の執筆依頼、原稿確認、デザインチェック、表紙の選定等数多くのプロセスを経て綿密な計画の下で機関誌の作成が進められていることを知った。いずれかの工程に遅れが生じると、それはそのまま発行日の遅れにも直結する。だからといって駆け足での校正や確認作業だけでは機関誌の質の低下につながりかねない。そのため一見すると余裕のある半年間という期間は、広くそして長く読まれる機関誌作成のために必要な期間だということが分かった。

数ある工程の中でも特に驚かされたのは出来上がった原稿の校正作業である。一つの記事の完成に約 1 か月～2 か月かかることもあり、複数人での原稿確認作業を通じて内容の精度を高めていく。機関誌の作成に携わるようになってから、1 冊が完成するまでに様々な人の手が加わっていることを実感することも多かった。昨年 9 月に発行された機関誌 sabo

Vol.138 では、設立 50 周年という節目となる記念号の作成に初めて参加し、とても貴重な経験ができた。またこの号の作成を通じて、先輩職員の些細な点にも気を配り機関誌作成に妥協しない姿勢を目の当たりにした。

機関誌 sabo では、目次を見ても分かるように、執筆された原稿はテーマに沿って整理され、そのテーマに応じたフォーマットに落とし込まれている。入稿時はシンプルであった原稿もフォーマットというデザインが施され形が整えられると、クオリティが一段と高まる。初校を確認する作業では、良く目を凝らさなければ気がつかないような、数ミリ単位のレイアウトのずれや色彩のわずかな違いも見落とさずきちんと修正し、より良い機関誌作成のために絶えず注力している場面を幾度も目にした。そしてこの丁寧に向き合う姿勢こそが、長く読まれている機関誌 sabo のクオリティを維持しているのだと認識させられた。

今号 Vol.139 では自身が執筆した原稿を自身が確認するという不思議な感覚があるのと同時に、広報の一端を担う者としての役割を実感する機会ともなっている。そして今後は Vol.138 の作成の際に目にした、丁寧で徹底して原稿に向き合う姿勢を今号も含めたこれからの機関誌作成に実践していくつもりである。

私が直接的に砂防業務に携わることは少ないが、広報的な立場から砂防の果たす役割を機関誌 sabo や STC のホームページを通じて発信することの重要性を日々忘れずに今後の業務に臨んでいきたい。この機関誌 sabo は読者の方を始め、執筆者そして印刷会社や運送会社等、多く人の支えによって成り立っていることは言うまでもない。最後に今号 Vol.139 が皆様に楽しんで読んでいただけることを心から願いながらこの文章の締めとしたい。